

ル・コルビュジェの住宅作品におけるスロープの構成について —創作思想と動線を取り巻く諸室の形態から—

1276 穂苅武

指導教員 教授 高宮眞介、助手 佐藤慎也

1. はじめに

スイス生まれの建築家、ル・コルビュジェは19世紀から20世紀にかけ、「住宅は機械である」という当時では衝撃的な思考を確立し、様式主義に対する建築界の改革の必要性を多くの著書によって導きだし、かつ自身の手がけた多くの作品によってその思想を現実のものとして人々をうなずかせた。なかでも住宅の中におけるスロープの採用というのは現在の日本においてもなお、とても新鮮である。彼は住宅を「幸福を生む場」とも述べており、住宅を一生涯作り続けている点においても、彼がいかに住宅に建築の根源を思いそして大切にしていたかを伺うことができる。

現在日本は高齢社会（一般に「高齢社会」とは、総人口に占める65歳以上の方の割合（高齢化率）が14%を超えた社会を指し、21%を超えると「超高齢社会」と言われる）に入っており、バリアフリーという考えのもと公共建築を始めとして段差解消の一時的処置を施している段階である。しかし、それは住宅にまで行き渡っているとは言いがたく、また敷地に制限がある等の理由で導入が困難なのが現状である。

2. 研究目的と方法

本研究では20世紀初頭に人々の生活を機能という概念に分け、現代の建築の基礎を築いたル・コルビュジェの住宅について、スロープの導入意図と動線を取り巻く諸室の形態との関わりを考察し、ユニバーサルデザインの道具となりうるスロープと諸室の効果的な構成手法の一端を明らかにする事を目的とする。

具体的な方法として、コルビュジェ自身が言及しているスロープに関わる空間の創作思想を文献から紐解き、それと同時に図面から得られるスロープと主動線の関わり、スロープを取り巻く諸室の形態の配列について研究を行う。

3. 研究対象

初めてスロープが用いられる1922年の住宅プロジェクトから1951年のショーダン邸に至る住宅5作品について研究を行う。

- 1922 オートイユの住宅 *
- 1923 ラ・ロッシュ／ジャンヌレ邸
- 1928 サウ^o オア邸
- 1949 クルチェット邸
- 1951 ショーダン邸

* 実現していないプロジェクト

作品の選考については、ル・コルビュジェの全住宅のうち、内部に異層間をつなぐものとして計画されたスロープを含むものについて取り上げ、情報不十分なものを除き実現された作品について行う。ただし、プロジェクトだが初めて住宅にスロープが見て取れるオートイユの住宅は取り扱う。そして動線の意図を汲み取るため3層以上の住宅について行うものとする。

4. ル・コルビュジェの住宅における思想と背景

「しかし散歩を続けるのだ。・・・アラビアの建築は貴重な教訓を与えてくれる。歩きながら鑑賞することだ。歩くことで、移動することで、建築のつくられ方が展開してゆく。これはバロックの建築と正反対の原理だ。そちらは紙の上で構想され、理論的な固定点をめぐってつくられる。私はアラブの建築の教訓の方を選びたい。」*1

「生物的現象」と「造形的現象」の2つがあるとコルビュジェは述べている。それは要するに機能主義といえどもそこには必ず感性と理性に作用される事をも設計の段階で考えられるべきであるという事が述べられており、その点から住宅の諸機能を認識し、教え上げ、分類整理する必要性を導いている。さらにそれがどのように隣接したら有効であるのか、正常な順序で流れるのかを連続して行われなければならないとする点においても、コルビュジェは動線をととても重要としている。

5-1. オートイユの住宅（1922）

一階の螺旋階段を中心とした開口部などが左右対称の矩形の部屋に対し、スロープを含む居間に関しては一方に全面開口が大きくとられる。スロープを経由する動線は、二層から三層にかけて意識されてつくられていることがわかるが、一階から進む動線が空間の軸線のつくりから用意されていることを読み取ることが出来る。また、空間の質に関しても均質から方向性のある空間、そしてまた均質といった具合に変化をもたせた空間が挿入されている。断面を見ると、スロープのある二層以上が宙に浮いているようにも見る事ができ、また、各層を縦断する螺旋階段を含む空間が縦の方向性を、スロープが横への動きを強調している。

5-2. ラ・ロッシュ／ジャンヌレ邸（1923）

空間の軸方向は動線と一致し、それは螺旋を描くように構成されスロープは唯一の動線に含まれている。空間の質も均質、不均質の順に構成され、最も空間の変化をもたせているギャラリーにスロープが置かれ、湾曲した形状によって開口部では行えない変化をつけたと解釈できる。断面においてはピロティーによって持ち上げることで、横への移動空間であるスロープ付きギャラリーを外部に対して誇示している。

5-3. サウ^o オア邸（1928）

一階で車の動線から導かれた曲面に対し中心の入り口に軸をもち、中心に設置されたスロープはまさにこの住宅の主軸として計画されている。無数の柱により秩序だてられた軒下をくぐり、スロープで二階へと足を運ぶと、そこには書斎や屋上庭園など、この住宅の主室が不規則におさめられ、さらにその上の最上階には豊かな円弧を描いた変化のあるソラリウムが待っている。スロープが単なる動線の一部から映像を作り出す装置の重要な道具として初めてここで具現化し、二重の螺旋が機能をまとめあげ、シーンを作り出していることがとても重要である。

5-4. クルチュエット邸(1949)

この作品は不整形で起伏のある小さい敷地に建つ診療所と住宅のコンプレックスである。スロープによって住戸と診療所がうまくつなぎ合わされている。白の時代から約20年経過し、庭やボイドの差し込み方が以前にも増してより立体的になっており、単純に水平な層に対して縦断するだけではない複雑化した全体構成が伺える。スロープが完全に平面のグリッドや軸に対して距離を置き自由に扱われており、空間の質がその形というよりもボイドによって出来た空気層の形によって変化を与えているのが以前とは異なる部分である。

5-5. ショーダン邸(1951)

平面を見るとそれまで丸柱だったものが二辺の寸法が異なる方向性のある角柱に変わり、構成もとても複雑になっている。多くのボイドがあげられ、半外部な空間がつながっている。これはサウ・オア邸に見るドミノの水平な層をスロープが滑らかに縦断することにたいして、ボイドによって光や空気そのものを縦断させるを行っている。スロープは自由を与えられ、軸に関係なく置かれており、外部にスロープが突出することで、本体の立方体の外形に変化とスロープの存在を生んでいる。そしてボイドと絡み合っさらに縦方向の視線と期待を生み、様々なシーンを作り出している。

6. 考察

コルビュジェの5つの住宅作品を「白の時代」から晩年までスロープの配置とそれを取り巻く機能の性質についてたどってきた。各作品を性質の異なる室ごとに色分けし、スロープとの関係を見てみると、まず動線をめぐる上で各層間で均質的空間から手法的空間へと必ず移り変わるように組み込まれている事が読み取れる。クルチュエット邸に関しては建物が住宅のみの機能だけでなく診療所も備えている点で例外的な面も多いが、スロープそのものの扱われ方、柱のグリッドに対する扱われ方について、移り変わりの過程を示している。各層をめぐる動線からの多様なシーンが初期の作品からうかがう事が出来ると同時に、その動線に含まれるスロープの割合が次第に増している事にも注目したい。2層吹き抜け空間に設けられたスロープから建物全体の層をめぐる動線そのものとなることで、階段では得られない流動的なシーンの体験を可能とする事に成功している。ドミノシステムによって平面に自由を獲得し、機械主義のもと現在にまで多大な影響を及ぼした概念により空間ヴォリュームが決められた。しかし自らの「東方への旅」からの空間体験を作品に持ち込もうとし、古典主義に見られる決まった軸によって規定されていた単調な空間だけでなく、手法的な空間と交互に動線に絡めていく事で、まさに流動的で変化があり、時間軸を内在する建築へと結晶していったといえる。そしてなにより、それを可能としたのは螺旋階段による層間の縦の移動にかわって、徐々に作品の中央へと用いられ、幾何学、グリッド、ボイドを利用した変化のある空間配置と絡み合ったスロープの効果なのだといえる。それは水平垂直移動する廊下でも螺旋階段でもない、なめらかな場面の時間変化をもたせるための唯一の道具であったといえる。

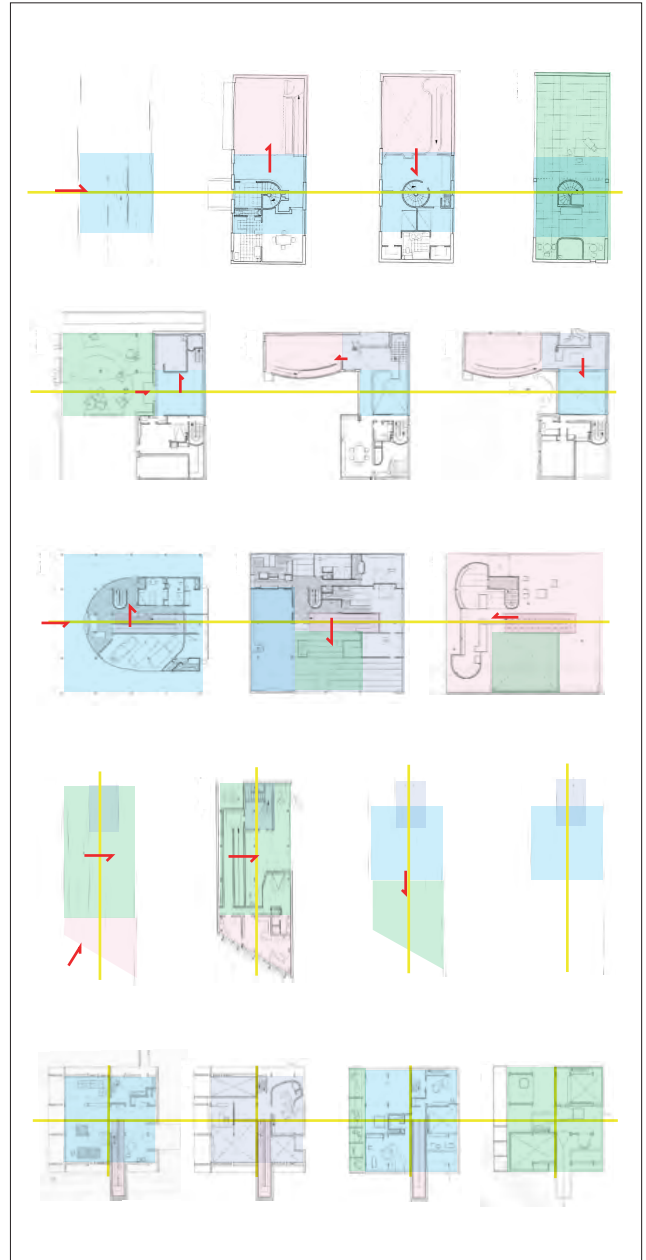


fig. スロープを取り巻く空間の質と軸方向
上から年代順(1922年~)左から1F
機械的空間(シンメトリック、正方形グリッド) = 水色
手法的空間(方向性、曲面、ノングリッド) = ピンク
変移空間(グリッド、矩形、ランダム) = 紫色
中心軸 = 黄色 室方向 = 赤矢印 庭園 = 緑色

【参考文献】

ル・コルビュジェ全作品集(ル・コルビュジェ著)
プレジジョン上下(ル・コルビュジェ著 鹿島出版会)
以下同著者同出版社
モデュール1&2
東方への旅*1
ル・コルビュジェ建築の詩(富永 譲著)

ル・コルビュジェの全住宅(東京大学編 TOTO出版)
ル・コルビュジェの建築作品における斜めの床による構成形式(日本建築学会学術講演便概集1997年9月)